

論 叢

ランケに關する研究(四)

小林 秀雄

(一) ランケの史觀—イデー說 (Ideenlehre) について

眞實の世界が假象の世界と對立してゐる。假象の世界は深く入り込めば入り込むほど、益々深い假象を現し、遂には無象となつて終ふが、かのものは本質に終る。(ランケの日記の一節)

ロレンツはランケが使用してゐるイデーなる詞には、種々な意義があり、また多少漠然たる感があるといふてゐるが、之は必ずしもランケのみに向けらるべきものではなく、イデアリストの總てが受けねばならない評言であり、寧ろイデー說の本質に基くものであると思ふ。バウフはその「イデー」の序論に「イデーの意義の多種と多様とは明白に認めねばならない」といふてゐる位で、特

に説明を要しないと思ふ。なほロレンツはランケのイデーなるものは「多くの場處に於て世界の外に存する生活を有するものの如く、來りて、また往く獨立なイデー世界を了解せしむる。實に世界の精神は生活から離れて居り、假令イデーによつて將來されるとはいへ自由な精神を有するものである」といひ、ランケのイデーが獨立な生活を有することを怪んでゐるのであるが、之はランケがスコラ哲學を批難してゐる詞に、「この見解によれば、イデーは獨立な生活を有し、總ての人はイデーに充されてゐる只の影であり、幻である」といふてゐる點から考へれば、明白にランケのイデーなるものが、獨立の生活を有するものに非ざるを示してゐる。然るに拘らず、ランケのイデーが、ロレンツの考ふる如くに見られるのは、是亦イデーの本質によるもので、之についてはプラトンのイデー説を顧みるならば思半ばに過ぐるものがあると思ふ。

プラトンのイデー説を見ると、それが實在なるが如く、然かも實在の外にあるが如くに思はれる。今バウフの詞を借るれば、プラトンのイデーなるものは「實在にして實在ならず、實在ならずして本來また眞實に實在であり、實在の外に、また實在の内であり、實在に内在し、また實在以外にある。此等相對立する總てのモメントはイデーを現すもので、之は實在の核心であつて本體である。即ち實在的實在である」といふ。之と同様にランケのイデーなるものも世界の外に存するが如くにして世界の中にあり、世界の精神及び生活より離れ居るものの如くにして之を結合して居り、自由

なる精神なる如くにして不自由なる精神であるのであり、イデーの本質から考ふれば更に奇とすべきものではないのである。

今ランケが種々なる形容詞を用ゐて表してゐる多數のイデーなる詞を排列して見ると、先づ神的イデー、根本原理たるイデー、最高善を立つべきイデー、次に生れながらのイデー、人間精神生活の屬すべき永久的イデー、最後に自然法及び道德的宇宙組織の永遠の原理たるべきイデー等である。今此等の詞からして、ランケのイデーなるものを考察して見ると、彼のイデーなるものには、實體をさすものがあり、觀念を示すものがあり勢力を現すものがあり、また法則を意味するものがある。かくて此等を概括して見ると、ランケのイデーは人間の思考及び意志の動作を生ぜしむべき源泉、勢力並に之を支配する規範を含蓄するものと見られるのであつて、言を換へて云へばランケのイデーなるものは、人間の思考及び意志の動作を生ぜしむる原因であり、勢力であり、同時にその方向を定め、またその範圍を限定するものであると見ることが正當であると思ふ。

更に此等のイデーなる調査を仔細に觀察すると、ランケのイデーの根本は神であつて、こゝから神的イデーなるものが生ずるのである。この神的イデーはいふまでもなく根本原理たるイデーであ

り、また最高善を立つるイデーに外ならない。而してランケの詞によれば「かゝるイデーは一切の精神的個體に存すべきもので總て人間は皆生れながらにして、かゝるイデーを神より受けてゐる」のである。かくてイデーは生れながらのイデーであり、また人間精神生活が屬すべきイデーである。こゝに總て人間の生活を精神的に觀察せんとするランケの特徴が最明白に現れてゐる。さて更に進んでランケの稱する自然法及び道德的宇宙組織の永遠の原理たるイデーなる詞について考へると、ランケは單にイデーが道德的宇宙組織の原理を支配するのみならず、自然的宇宙組織、即ち自然界をも支配するものと思ふのであつて、之は世界を精神的に觀察せんとする一般イデアリストの本能のひらめきであると解せねばならない。ランケの詞に「イデーは非常に優勢なものであつて人間はイデーを支配し、また之に支配さるべきものであるが、その薄弱と無力との爲めに、時々イデーの支配から脱出することがある」といふて居り、この詞を考へて見ると、人間の生活にはイデーの統治を受けざる部分が存在する筈で、一見之は精神生活に對する物質生活なるが如くに思はれるが、ランケの考はこゝに存せず、全く違つた方向を指すものと考へられるのであつて之はランケがバンテリズムを批難した詞に「然る時に人間は其性質中に存する精神的過程によつて、自ら生れ出る製作的の神となる」といふてゐるのを見ると、人間には神的ならざる部分の存することを意味するものではないかと想像される。

概してランケはイデアリストとして正しく自然を輕視してゐるのであつて、之は彼がブンゼン及びアレキサンダー・フォン・フムボルトを評してゐる詞を見ても、著しくこの感を深うするのであるが、彼の作物を見ても、實際ランケのかゝる方面に於ける智識は決して該博であつたとは考へられない。又之は總てを精神化せんとする彼の立場から見て、さほど必要でなかつたものと思ふ。

次に述ぶる問題はこの問題を證明する補助となると思ふ。之はランケの稱する「イデーは神的源泉より生ずる」といふ詞と「人間は一般イデーに屬し、また之を創造する」といふ詞とであつて、この二つの詞は明かに矛盾してゐるものの如く見えるのであるが、之は既に述べた如くに、人間の思考及び行爲を支配するイデーの根底をなしてゐる法則及び目的は、神より人間に入れられたものであり、人間の本性に存在してゐるのであるが、元來、之は發展した形で入れられたものではなく、全く萌芽として入れられたのであるといふてゐる點を教へると、この矛盾は明白に解決される譯である。即ちこの萌芽をば思想によつて發生せしむることは、正に人間理性の問題たると共に、之を行爲に利用することは、人間自由意志の問題となつてくる。かくしてイデーなるものは神的本源より出づるものではあるが、(其媒介より人間精神を通じて)人間には必ずしも神的なるものゝみが、完全に包含されて居るものとはいはれなくなる。かく考ふることによりて、この出發點が明白

に容認されるに至ると思ふ。

總てのイデー説が勿論單に精神的意義を有するものであるが如くに、ランケのイデー説も同一である。然しランケのイデー説は特に倫理的及び宗教的イデーに重きを置く。彼の詞に「倫理的及び宗教的イデー、而して一般に人間のイデー」といふが如き使方を見るのであるが、彼は更に一層力を倫理的イデーに置くのであつて、彼は「歴史家は最初に人間が或時期に於て如何に考察し、生活したるかに重きを置かねばならない。次にある不變な、永久的な主要イデー、假令ば倫理的イデーは別として、總ての時期が其特有の傾向、其特有の理想を有することを發見す」といひ、また「一般人間の立場から見れば、歴史的には只大民族によつて代表される人間のイデーは漸次全人類を包括すべきであり、之は内的道德的發達である」といひ、ランケの稱する神のイデーは正に倫理的イデーたる觀を強うせしむる。彼によれば倫理的イデーは絶對であり、不變であり、一般のイデーは變化的であることを説いてゐるが、彼のイデー非發展説もこの邊から生じたものと考へても、非常な間違ではないかと思ふ。

ランケのイデー説は、之を主觀的イデーと客觀的イデーとの二つに區別することによつて、更に

明白に説明されると思ふ、即ち單に一般的價值を有するものを對象として觀察する觀念は主觀的イデーと稱すべきものであつて、このイデーは精神的個體の精神の内に充實してゐるものであつて、かゝる精神的個體は個人は勿論、國家及び教會等の如き大なる社會的個體をも含むものである。

而してこれらのものの充滿してゐるイデーが彼等を支配し、又更に廣い目的を有する働作を規定する場合、つまり大なる社會組織、假令ば國家及び教會等の活動について、ある確實な目的が現れて、其目的が追究され、或は強い意識の生じた場合、ランケは好んで傾向なる詞を用ひてゐる。

この傾向は當然現實にして、熱望されてゐるものゝ獲得を目的としてゐるのであるが、かくして獲得されたものに、精神的な形象を與ふる思想は、客觀的イデーと稱すべきもので、之の中にはかゝる獲得者にとつて新しい試煉や、完成などを刺戟し、また實現されるべきものゝ目的觀念を喚起する動力を含んでゐるのである。

かくて主觀的イデーと客觀的イデーとを結合してゐるものは、ランケの所謂傾向 (Tendenz) であると思はれる。然しランケは常にこの傾向なる詞をかゝる意味で用ひて居るとは限らないのであつて、屢々イデーなる詞と傾向なる詞とが、同じ意義に用ひられてゐることが少くない様に思はれる。これは其場合、場合を考へなければならぬ。

既に述べた如く、傾向とイデーとの關係は全く不可分離のものである。「各時期は其特有の傾向と特有のイデーとを有す」といふランケの詞は最もよく之を證明してゐる。また彼は「總ての世紀は發展したものと考へられる傾向が存在して居り、只このイデーによつて總て他のものを測定せねばならない」といふて居り、また「歴史家は世紀の大なる傾向を區分せねばならず、またかゝる種々なる傾向の復合なる人間の歴史に開展せねばならない。吾人は神的イデーの立場から見、人性は自分の中に無限な多様な發展をかくして居り、之が漸次現れ、殊に考へ得られないほどに神秘的な、偉大な、吾人に判らない法則によつて現れるものである」といふてゐる。彼の説明によればローマ帝國及び中世ドイツ王國、下つてフランス及びプロシヤ諸邦の傾向は、宗教的には一つの教會が、多數の教會といふことであり、政治的には、民主的か、貴族的かといふことであり、總ての社會團體にはかゝる傾向があり、之がイデーに基づくものであるといふ。尙、彼は十六世紀及び十七世紀の歴史を支配する傾向なるものを描き、之は相互に世界を支配せんとしてゐるカトリック的神學組織とプロテスタント神學組織との反對、並に、半ばかゝる反對と調和し、半ば之と争ふてゐる俗的權力の政治的努力を擧げてゐる。一般に彼はイデー、又は傾向なるものの中に、國家權力及び教會權力の働作を喚起す總ての大目的を考へて居り、而して此等の目的が相反する場合、此等權力が内には黨争を生じ、外にはその外交政策の決定上避く可らざる分裂を來すものであり、總て國家の大戦

なるものは多方面より生ずるのではなく、國家の權利及び利益に對する甚しい侵害に基くのである。傾向が互に相争ふといふのは、かゝる場合に適用さるべき詞であるといふてゐる。

幾多のイデーがある如くに、幾多の傾向がなければならぬ。而してイデーに主要イデーが存する如くに、傾向にも指導的傾向の存すべきは當然であつて、ランケは常にこの指導的傾向なるものを止揚してゐる。ランケによれば、歴史家の職務は歴史事實の中にかゝる指導的イデーを求むるにありといふのである。

ランケはイデーの發展なるものを認めない。ランケの發展觀念については、進講録の第一講の「Wie der Begriff "Fortschritt" in der Geschichte aufzufassen sei」の條や、その二のマキシミアンと彼との會談や、第二講の所に詳細に述べられてゐる。之によれば、彼は自然界に於ける發展を認むるも「人間を支配する大なる精神的傾向は、或は併立し、或は從屬するものであつて、かゝる傾向には總て常に一定の特有なる方向を有し、他のものを讓步せしむる働きをなす、かくて假令ば十六世紀の後半には、宗教的要素が非常に重きをなし、文學的要素が之に讓步し、十八世紀には功利的勢力がかゝる地盤を得て、技術及び之に類せる活動が之に讓步せざるを得なかつた」といふて居りまた「人間の總ての時期に於て一定の大なる傾向が現れるが、發展なるものは、總ての時期に於け

る人間精神のある運動の現れに歸すべきもので、この運動は、或は一方の傾向、或は他方の傾向を昂め、特にそれらの中に表れてゐる」といひ、更に彼のフランス史の「イデーの發展と考へられるのは只屢々モメントの泡立と見るべきである」といふて居り、最後に「歴史を追求して見ると、絶對の發展、非常に明白な向上は、物質的關係に於てのみ假定され得る。之には追却といふことはない。然し道徳的な點に於ては發展は追求され得ずして、道徳的イデーは實際外延的に擴り得るのみである。また精神的な點について見れば技術や、文學を生ずる大作は、昔から見ると今日は非常に多數によつて樂まれるが、然しホーマー以上の大詩人があり、ソフォクレス以上の大劇作家があることを希望するのは、全く笑ふべきことである」といふてゐる。彼はかく明白に物質的事物を除き、各種の對象に於ける不斷の發展なるものを無視し、度外視してゐるのである。之は彼のイデアリストとしての立場から見て當然の歸結であると信ずる。

今、吾人は歴史家は何をなすべきかに關して彼の詞を聞かねばならない。彼はいふ、「イデーは神から生じたものであるが、歴史は神の運命を示すものであるから、之は單に記述されるべきもので最後の瞬間に概念に總括され得べきものでない」と。かくして彼は明白に概念的歴史を排斥する。而して「歴史家は總ての世紀に於ける統治的傾向の證明、即ちイデーの證明をなすべきである」と

いひ、また「史家は歴史事實に現れる指導的傾向を求め、之を記さねばならない。指導的イデーには、之が統治的傾向であるといふ以外には何物をも了解されない」といふてゐるが、彼は進講録の第一講 *Wie der Begriff "Fortschritt" in der Geschichte aufzufassen sei* の中に詳しく歴史家の職務を述べてゐるから、茲に之を擧げて置く。

彼はいふ、「歴史家は其着眼點を先づ人間がある時期に於て如何に考へ、如何に生活したかに向くべきで、かくてある不變な、永久な主要イデー、即道徳的イデーを別として、ある時期が其特有の傾向及び其特有のイデー即イデアルを有することを發見する。さて各時期は、そのもの自體として其權利と價值とを有するが、何がそれから生じたかを忘れてはならない。次に歴史家は個々の時期の相違を認識し、連續の內的必然性を觀察しなければならない。この際ある進歩が誤認されてはならないが、私は進歩が直線上を動くものとは主張したくない。却て之は自己の方法で道を開く水の流の如きものである。神——私は敢て之を注意せねばならないが——は總ての歴史的人間を全體として觀察し、至る所に同様な價值を見出す如き時を有たないと思ふ。人間教育のイデーは勿論多少の眞實を有するが、神の前には人間の總ての時代は平等に考へられるのであり、かくて歴史家も、この事實を尊重しなければならない」と。要するにランケの考ふる歴史家の任務は、時期の指導的傾向をば主要イデーによつて測定し、事物の精神的脈管を追求するに存するのである。

最後に彼の史觀が全然精神的であるが爲に、自然ランケは人類の心理的方面に注目するに至り、實際この時代に到るまで、ランケほどに人間の心理的解剖に力を用ゐたものを見ない。彼は歴史人物の精神生活をば十分明らかにするまでは、この働きを止めなかつた。彼は驚くべきほどに、他人の感情中に入り、其思想を探ぐり、彼の詞を借るれば、人の心中に侵入した。然しこゝにも彼の倫理的イデー觀が勢力を示して居つて、彼の心理解剖の最成功してゐるのは宗教的人物であり、俗人に對しては適當して居らない。彼の心理的歴史記述の上乗なものは法王史であつて、宗教改革時代の人物になると、やゝ不手整な感がある。假令、彼の心理解剖は個人心理に限られて居つて、まだ社會心理に及ばなかつたとはいへ、彼が心理を歴史に應用した功績は沒せられないことであり、後世歴史心理派の發生の源を開いたものと見る事が出来る。

然しランケは自然及び物質的生活については非常に無頓着である。之については彼とマキシミアンとの會談の中にも見られる如く、彼は自己のイデー說の立場からして、總ての物質界をば單にイデーより發展せしめざるを得なかつた。彼は物質の進歩を以て全然人間精神の運動に歸してゐる。かくして彼は自然人間の生物學的勢力を無視し、歴史發展上に重大なる意義を有する經濟問題までも輕視してゐるのである。彼は他のイデアリスト的歴史家の如くにアダム・スミスやリカルドの説

に注意を向けなかつたので、之が爲めに彼の史觀は明かに一面的觀察となつて、將來歴史の唯物的觀察——唯物史觀を必要ならしめる結果に至つたことは、爭はれない事實である。

ランケはかの歴史を抽象し、また歴史を規定するイデーを認識せんとするヘーゲル及び其他のイデアリスト的史家の如く、目的論的論點に立つた空想的史家ではない。彼は確かにかゝる流行から離れて、全然事實的論點に立つて、歴史を本來あつたものの如くに觀察せんと試みた經驗的史家である。彼は明かに形而上的史學說の迷跡に入ることを欲せずして、歴史の多様な根本問題をば精確に試験し、評價することを試みたが、然し彼はなほ時代を脱却することが出来なかつた。

ランケは他のイデアリスト的史家と同じく、歴史の背景としてはイデーを認め、イデーを尊重した爲に、歴史を屢々不適當に精神化した缺陷の存することは拒まれないが、更に重要なことは、彼が他のイデアリスト的史家と同じく、イデーをば單に歴史の動力として觀察したのみで、このイデーが如何にして成立するものであるか、變化するものであるかについては、更に何等の説明を與へて居らず、總て之を以て、全然秘密なる原因に歸してゐるのであり、歴史に有力なる高き權力の規定を尊重し、その目的に應じて之を研究することをしなかつた。

而して彼がイデアリスト的史家として餘りに精神を過重した弊は、彼をして十分に人類の物質的

生活を認識し、之を正當に評價することを得ざらしめた憾がある。

ランケは他の理想史家と異り、時代精神とか、民族精神とかいふ漠然たる名稱を除き、また歴史の過程をば、近代歴史哲學の空想によつて成立せる組織より脱せしめ、其イデーを實際に存在する事實より導き、また眞實の要求に役立しめた。現在其缺點に關らず、彼の價值の認められるのは實に茲に存するが、同時に歴史をして唯物史觀の試鍊に残さざるを得ざりしことも考へねばならない。

ランケの史觀の他の重要なもの、即ち國家論及びイデーと國家論との關係については、リツタ！のランケ論に詳細に記述されて居り、私が言を挟む餘地がないから茲には之を略する。なほ私は曾て國學院雜誌に其譯文を載せたことがあるから、總てを之に譲ることとする。只、他日機を得たならば、更にランケの歴史的方法について考察したい希望が残つて居る。

此稿を終るに當り、友人國學院大學教授古田良一君によつて與へられた好意に對して感謝の意を表せねばならない。

●訂正 ランケに關する研究（三）の第二一頁六行目の「」内の文句は「人間の歴史は命題、對當、及び媒介等の論理學上の過程を積極的に、また消極的に語るイデーを述べてゐる」と入れ違つて居つたから、こゝに之を訂正して置く。